研究 No. 0527

「活き活きとした人生」を創出する高齢者のための居場所づくり

ーイタリアの「社会センター」と日本の「まちの縁側」の比較研究ー

主査　乾　亨*1
委員　延藤　安弘*2，　藤田　忍*3，

本研究の目的は、日伊比較調査により、高齢者自らの生活に「活き活きとした人生」、ウェル・ビーイングを送りうる居場所づくりの成立基盤と実践的方向性を明らかにすることにある。イタリアでは単独安心性と相互楽遊性の両方が生かされる居場所で、高齢者自らがお互いに楽しみながら生き方を高める志でつながる「志縁」型の取組みが進んでいる。日本は、伝統的な「地縁」型の地域組織があるが、居場所づくりには「志縁」との統合的バランスが大切である。地域の空間的資源と人的資源を生かし、自己とまわりとの開かれたコミュニケーション、笑い、ユーモアなど高齢者の身体の社会的資源性の潜在性を生かすことが高齢者の居場所づくりとなる。

キーワード：1）高齢者，2）活き活きとした人生，3）ウェル・ビーイング，4）単独安心性，5）相互楽遊性，6）地縁，7）志縁，8）空間的資源，9）人的資源，10）社会的資源

PROVIDING PLACES FOR AGED PEOPLE WHICH CREATES "WELL-BEING"

— A comparative study of "Social centers" of Italy and "Community engawas" of Japan —

Ch. Koh Inui
Mem. Yasuhiro Endoh, Fujita Shinobu

Discussing, through a comparison between Japan and Italy, how aged people can have places in their lives that enable them to enjoy "well-being", this study is intended to make clear the foundations on which such places are created as well as the directions actual programs should take. In Italy, what may be called a "tie-of-will" approach is in progress. In the case of Japan, characterized by traditional community-rooted organizations, it is important, for the creation of places for senior citizens, to integrate this "geographic-tie" orientedness with the "tie-of-will" approach in a properly balanced way.

1. 研究の意義・目的・方法

1.1 研究の意義・目的

高齢化社会の進行の中で、高齢者は両義的存在である。高齢者は身体機能が衰えて介護を必要とする存在である反面、個々の高齢者はコミュニティのなかで認知され、あるいは相互交流の中で支えあい、安心を享受し、「活き活きとした人生」（well-being）を送りたい存在である。本研究は後者に光をあてるが、そのことの社会的ニーズは高まりつつある。例えば介護予防の視点や「アクティブ・エイジング」[文1)]の視点にそのことがあらわれている。

本研究は自らの生活を自己決定できる「活き活きとした人生」を送りうるような「居場所」づくりを考察する。「居場所」はコミュニティ心理学[文2)]などで定義づけられているが、本稿でいう「居場所」とは人と人との関係のなかにおいて自己の所属感と受容感をえられるかけがえのない「居場所」であり、その運営を担う人的資源・しくみを有し、メンバー間の相互作用・諸活動が行なわれる物理的な空間としての「居場所」であると定義しておく。

こうした高齢者の「活き活きとした人生」を送りうるような「居場所」の検証のために、本研究はイタリアの「社会センター」と日本の「まちの縁側」を比較考察するというアプローチをとる。なぜならば、前者は日常的な居場所のみならず、食事会やダンスパーティなど非日常的な「活き活きとした人生」を楽しむための豊かな事業がすべて高齢者である会員自らの手で行なわれていることにあり、その活動性の高さと会員の広がりは目を見張るからである。一方後者は、民設民営であり、高齢者や子供たちが気軽に立ち寄り、交流し、ともに時を過ごす「場」を提供する地域の草の根型の内発的活動によって参加者の生活の質向上には見るべきものがある。[文3)]

本研究の目的は、イタリアの「社会センター」とわが国の「まちの縁側」の双方に着目し、その活動内容・場

*1 立命館大学産業社会学部　教授　　*2 愛知産業大学大学院　教授　　*3 大阪市立大学大学院　教授

所、仕組みや組織、あるいはその成立基盤等を比較研究することで、わが国における「活き活きとした人生」の創出を可能とする高齢者の居場所づくりのための実践的方向性を提起することにある。

1.2 調査方法と調査対象の位置づけ

本研究は、イタリアとわが国の事例調査を通して「高齢者が集い活き活きした生を送りうるよう〈高齢者の居場所〉を、高齢者自身が生みだし運営していく」ことの必要性とそのための要件を明らかにすることを目指している。そのため、小地域を基盤とする会員組織であり、全国組織を持つ高齢者の居場所「老人クラブ」の活動と、これも小地域を基盤としつつ個人的な志から始まった「まちの縁側」的な高齢者の居場所である三重県鈴鹿市の「縁側サミット」活動、そして、高齢者だけでなく多世代が自由に集える居場所づくり活動のなかで、担い手としてもサービスの受け手としても「高齢者の居場所」を提供している「千里ひがしまち街角広場」の活動を掬い上げ、イタリアの事例と比較検証する。

これらの典型事例はどのように位置づけられるのか。「高齢者自身による高齢者の居場所」を概観した場合、3 つの対比的特質によって、それぞれの居場所の特質を把握することができる。第 1 は「組織的—自然発生的（小規模性）」の差異である。第 2 は「地縁型—志縁型」である。地縁とは伝統的地域組織に結集するのに対し、志縁とは共に出会い協同することへの志で結ばれた関係づくりのことである。第 3 は「高齢者—多世代」であり、活動対象の世代による差異である。この 3 つの軸で今回の調査対象を位置づけると次表のようになる。

表 1—1　調査対象事例の「居場所」の性格の位置づけ

事例＼軸	組織的-自然発生的	地縁型-志縁型	高齢者-多世代
社会センター	○	○	○
老人クラブ	○	○	○
縁側サミット	○	○	○
千街角広場	○	○	○

2. イタリアの高齢者の居場所

本章では、イタリアの高齢者の居場所である高齢者社会センター（Centro Sociale Anziani 以下「センター」）[注1]の調査を通して、「高齢者が活き活きとした生を楽しむ」にふさわしい高齢者の居場所の特性とその成立要件を明らかにする。

2.1 高齢者社会センターの概要

ボローニャ市資料[注2]に「高齢者社会センターは、高齢者のための、高齢者自身による（しかし、市民全般に開かれた）、出会いと活動の場」と位置づけられている通り、センターは、高齢者グループによって自主的に経営される自立的な居場所であるが、施設は市が所有しセンターに無償貸与し[注3]、毎年の活動計画を区に提出する。その意味において、センターは市行政に属するサービスという側面と、市民活動という側面をあわせ持つ。主な活動は文化的企画（講演会や講習会）、レクレーション企画（体操・カフェなど）、遊び企画（ゲームやカードなど）、パーティやダンス、昼食会、小旅行などである。個々のセンターは独立した会員組織であり、年齢や居住地、国籍等による制限はなく、5€ の年会費を払えば誰でも会員になり施設を利用できる。センターは上部組織である ANCeSCAO[注4]に属し、会員は全国のセンター施設とサービスを利用できる。ボローニャ市、県、州、全国のセンターの数と会員数は表 2-1 に示すとおり[注5]、活動の中心は年金生活に入った中・低所得階層の労働者たちである[注6]。

表 2—1　高齢者社会センター施設・会員（’04・12）

	施設数	会員数
ボローニャ市	35(*1)	16,195
ボローニャ県	95	42,603
エミリア・ロマーニャ州	275	約 130,000
全国	1,150	約 360,000

＊1：1 箇所は菜園のみで施設はない

2.2 調査の概要

センター運動の発祥地であり、現在も活動が盛んなボローニャ市およびその近郊を対象に、センターの現状と活動を把握するため表 2-2 に記す 4 事例について調査を行うとともに、センターの役割を高齢者福祉政策レベルで評価するため、のヒアリングを行った。具体的な調査方法と対象者は以下の通り（ヒアリングはすべて通訳つき）

①予備調査（‘04 年調査）：’04 年 4 月～8 月
ジョルジョ・コスタ（以下「G.C」）代表、副代表ヒアリング、昼食会・総会・ダンスパーティ参与観察調査

②センター事例調査（’05 年 9 月）
(1)G.C：代表 V 氏（60 歳・元電話会社勤務・女性）・副代表 B 氏（63 歳・元郵便局勤務・男性）、一般会員 2 名（85 歳男性・81 歳男性）ヒアリング
(2)カーザ・ジャッラ（以下「C.G」）・ペスカローラ（PE）・ラ・マニョーリア（L.M）代表者ヒアリング

調査対象事例は、都心立地（歴史的市街地内）、郊外立地Ⅰ（計画的に開発された、分譲共同住宅地区）、郊外立地Ⅱ（公営共同住宅地区）、近郊都市立地、の 4 タイプから選定した。対象事例の概要は表 2-2 のとおり。L.M のみはボローニャ市近郊のブードリオ市。他はボローニャ市。

③福祉政策的位置づけヒアリング（‘05 年 9 月）
(1) ANCeSCAO 県代表・G.C の V 氏 B 氏・ボローニャ市社

表 2−2：調査事例の概要（05 年 12 月現在。郊外Ⅰ＝良質な分譲団地地区・郊外Ⅱ＝公営住宅団地地区。1€ ≒¥150 として換算）

事例名	地図	所在地型	設立	会員	年事業費	開所時間
①ジョルジョ・コスタ	08	都心	‘84	592	114,640€（約¥1720 万）	無休・PM2 時半~6 時半
②カーザ・ジャッラ	06	郊外Ⅰ	‘70	895	134,713€（約¥2020 万）	無休・PM3 時~6 時半,8 時半~11 時
③ペスカローラ	25	郊外Ⅱ	‘85?	298	53,000€（約¥795 万）	無休・PM2 時~6 時半
④ラ・マニョーリア	市外	近郊都市	‘95	1,314	143,000€（約¥2145 万）	無休・AM8 時半~12,PM1 時半~6.7~11

会福祉担当者・ポルタ区長、への集団ヒアリング

(2)ボローニャ県社会政策責任者へのヒアリング

2.3 ボローニャ市におけるセンター活動の状況と役割

1)センターの分布

ボローニャ市のセンター34 箇所の分布を図 2−1 に示す。図からわかるように、ほぼ市域の住宅地全域に立地しているが、中心市街地（都心部：図中、グレーの濃い部分）[注7]には少なく、都市周辺部に多い。行政が計画的に配置するのではなく、市民グループの要求に応じて設置されるため、分布には疎密があり徒歩圏内に近接するケースもある。「中・低所得層の自主的要求に基づくため、そういう人達が多く住む地域に増える」（V 氏 B 氏）という言葉のとおり、中高層団地が建ち並ぶ地域や再開発が行われた地域に多い。センターは「放置された（市の）場所に入ることで、人の集まる場を作り、衰退地区を活性化させる役割も担っている」（V 氏 B 氏）。

2)センターの活動と運営

センターの施設条件は個々に異なるとはいえ、共通して、食堂や会議、体操教室等にも使えるホールやキッチン、バール（カウンター式の喫茶）[注8]、カードやゲーム用の部屋と、ダンスパーティも可能な庭か広場を有している。

基本的に毎日開所され、会員は施設を自由に使用できる。センターごとに工夫された有料・無料の企画が高い頻度で催され、会員は好みの企画を選んで参加する。参考のため G.C の‘04 年プログラムを表 2-3 に記す。年間総事業費はセンターによって異なるが、表 2-2 に示すようにかなり高額である。それらはすべてイベントやバールの収益、小口の寄付、他団体からの寄付によってまかなわれ、市からの助成金はない。

運営に関わる理事やバールの店員も ANCeSCAO の役員も会員であり、全員が無償のボランティアである。「年金があるので給与はいらない」という。G.C の場合、運営に関わっているメンバーは 10 名程度であるが「ボランティアは意志の問題なので、仕事の集中は問題にならない」という（V 氏 B 氏）。V 氏は「人の世話をするの

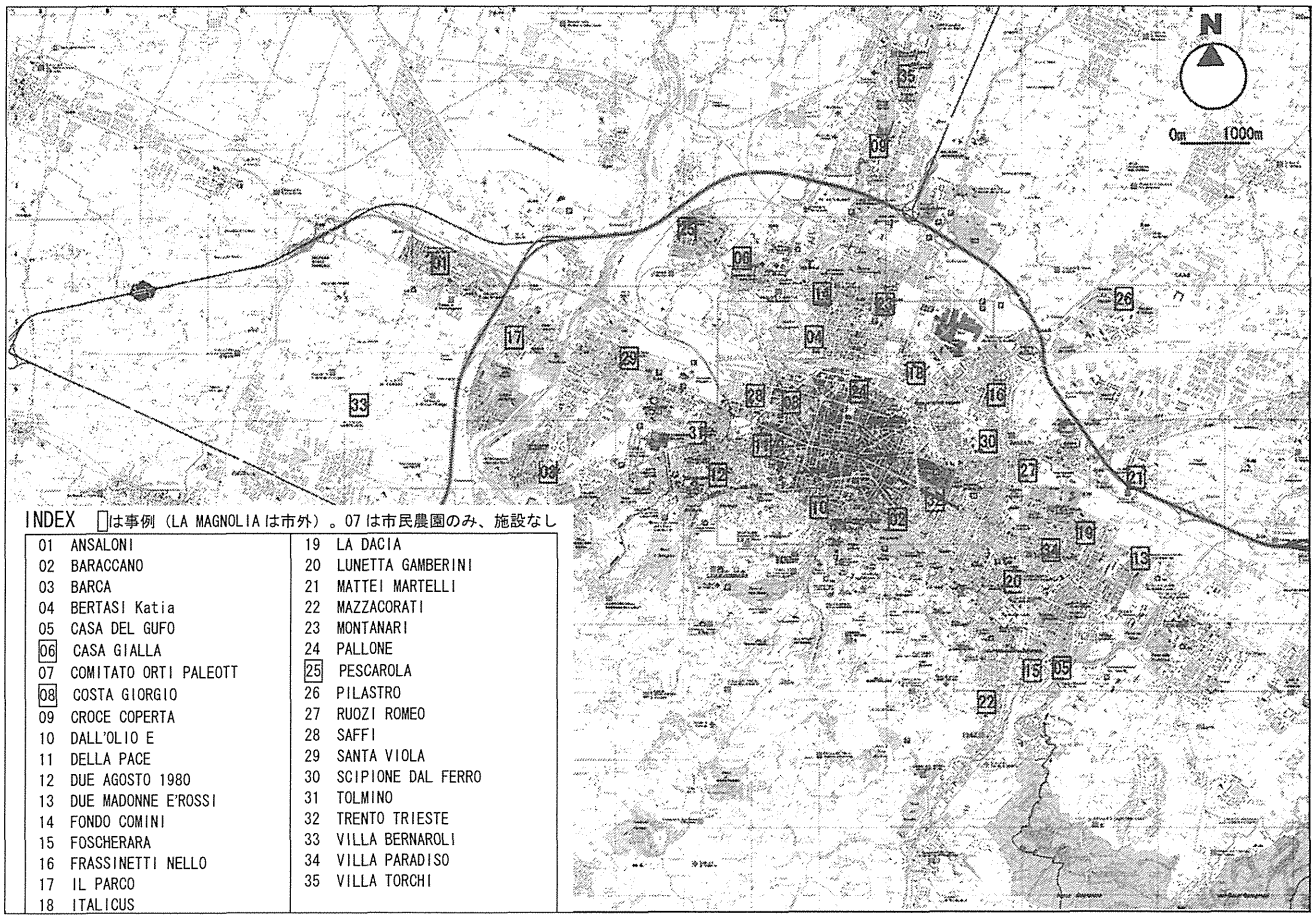

図 2−1 ボローニャ市の高齢者社会センター分布

が好き、問題を解決するのが好き。会社では労働組合運動をしていたし、息子の学校でも役員をしていた」と語り、B 氏も「郵便局時代から社会問題に取り組んでいて、区の評議員をしたこともある」という。センターは単に「老後、誰かと過ごしたい人」だけでなく「老後、人のためになにかしたい人」が集まる場であり、その想いを集め実現させる場でもある。

一般会員の参加動機、参加形態は多様であり、空間の豊かさと活動の多様さがそれを支えている。会員は近隣居住者が多いが、地域毎に所属が決まるのでなく各自の選択に任されるため、遠方からバスや自転車で通う者もいる。センター選択理由は「ここに友人がいたから」「パルチザンとしてこの近くで戦った」「近くの職場の仲間と一緒に参加した」などであり、選択が、近隣関係だけでなく、個人的思い出や職場での友人関係などによって行われることがわかる。

表 2−3：ジョルジョ・コスタ '04 年活動プログラム

継続的活動	特別の（日の定まった）活動	今年新しく追加するプログラム
● 体操教室 ● 文化教室（歴史・芸術・歌など） ● 月曜：ｸﾚｾﾝﾃｨｰﾅ（揚げパン） ● 金曜：ピザ ● 月 1 回の昼食会 ● バール（喫茶）：毎日オープン ● 夏期の土日祝：ダンス ● 文化的旅行会（'03 年は 6 回／年） ● ボローニャをテーマにした夕食会	● 御公現の日 ● サン・ヴァレンティノの日とカーニバル ● 春の女性の日 ● 復活祭のロト ● 5 月 1 日と夏のはじまり ● 6 月木曜日：文学と音楽 ● 7 月土曜日：ダンスと季節の果物 ● マリア昇天祭 ● 創立記念日	● 他のｱｿｼｴｰｼｮﾝとのｺﾗﾎﾞﾚｰｼｮﾝ（体育/ダンス/演劇/社会的連帯活動/文化や料理） ● カード遊び競技 ● 毎月の誕生パーティ

「いつも朝から来る。おしゃべりをしたりカードに参加したりはしない。庭に座っているのが好き。庭の手入れもしている」（a 氏:85 歳男性）、「ほぼ毎日来ている。仲間とカードをしたり政治の話や自慢話をしたりする。住まいは大きなアパートなので近所同士で顔をあわせる機会は少ない」（b 氏: 81 歳男性）というように、「男性は自分の居場所を求めてセンターに来る」ことが多いのに対し、「女性は家の近所にも話し相手がいる」から「夕方にきて、グループでお喋りする」ことが多い（V 氏 B 氏）。「妻は同じアパートの友達の家に遊びに行ったり公園でおしゃべりをしている。女性の方が近所と付き合うのは上手、男は老人になってから友達になるのは難しい」（b 氏）という状況は日本と同じである。

ダンスパーティでは、普段いつも同じ汚れたコートを着ている老人がパリッとしたスーツに身を包み、自信に満ちて多くの女性と踊りまくる場面や、二人合わせて 177 歳の高齢カップルが仲睦まじく踊る場面を目撃した。上述の a 氏や「ここで誰かの手助けをしているときが生きがいを感じる」（b 氏）という声でもわかるように、センターはたしかに「高齢者が活き活きとした生を楽しむ」居場所としての役割を担っている。

3)高齢者福祉政策におけるセンターの位置づけ

センターは元気な高齢者の施設であり、心身が衰えて寝たきりや引籠もりになっている高齢者を対象としていない[注 9)]。一方、65 歳以上人口が 26％以上に達する（'03 年 12 月段階。中心部だけならさらに高率）ボローニャ市行政にとっては、独居高齢者の状況把握と社会の中への取り込み、身体機能の低下予防が大きな課題になっており、センターへの期待は大きい[注 10)]。センターや ANCeSCAO と行政が共に認める、寝たきりに近い高齢者のサポートにおけるセンターの有効性は以下の 2 点。

①ネットワーク機能：センターに来る高齢者を通じて、近所や昔の仕事仲間の高齢者の情報を集めることが可能。例えば、突然一人暮らしになった高齢者を発見できれば、市がボランティアを派遣することができるし、居住地がオフィス化て夜間に無人化する地区の情報を得ることも可能。[注 11)]。

②行政とセンター間の情報伝達、意見交換、提案機能：市や区の社会サービス担当者とセンターの理事会メンバーは常に情報交換を行っているため、センターに集まった情報や問題点は、代表者を通してすぐさま市や区に伝えられる[注 12)]。センターや ANCeSCAO が新しいサービスを提案する場合もある[注 13)]。

さらに市の担当者は、まだ構想段階であるとした上で、センターに要介護の高齢者を招きいれてもらい（昼食会など）、センターがより広範な高齢者ネットワークを形成することで、市のサービスと高齢者ニーズの結節点として機能させたいと語る。

4)センターの課題

多くのセンターが設立後ほぼ 20 年経過しているため、世代交代の時期がきている。新しい人材が必要だが、近年、ボランティアが減少してきているという。要因のひとつは、10 年ほど前の年金制度の変更[注 14)]により、若い高齢者が参加できなくなったことである。いまひとつの要因として B 氏 V 氏は、社会構造の変容にともなう高齢者の質の変化を指摘する。「学歴も高くなり、運営能力は若い老人世代の方が上だろうが、やる気はない」「若い高齢者は好きなときに来て好きなことをする人は多いけど、活動に飛び込む人はいない」「かっては集団的社会（いろんな集団に帰属する）であり、人のために何かをする人が大勢いたけれど、いまは個人社会になっている」。現リーダー達は、「新しい世代では、カード遊びもダンスパーティも減るから、彼らをひきつける活動が必要」な時期にきていると判断しており「他のアソシエーションと協力して、歌や演劇など文化活動に力をいれ、近所の人たちに来てもらう試みをしている」「『高齢者

センター』という名前のために低く見られている。今後は高齢者だけの社会センターではなく文化的レクリエーションセンターをめざしたい」という（B氏V氏）。

2.4 典型事例にみるセンターの特質

異なる立地条件の４つのセンターの立地・設立の経緯・組織・活動などについて概観し、センターの状況と役割について具体的なイメージを提供する。

1）ジョルジョ・コスタ

写真 2−1　ジョルジョ・コスタでのダンスパーティの光景

＜立地＞歴史的市街地の北西部。工場と住宅が混在し、国鉄の施設や屠殺場もある下町であったが、現在は再開発が進み文化地区として整備されつつある[注15]。周辺には住宅も少なく夜間は人通りも少ない。

＜施設＞（図 2−2）もとは修道院の馬小屋。事例②④に比べれすこし手狭で古いが、活動には十分な広さである。ホールや食堂は他団体の活動にも貸し出され、センターの資金源にもなる。a 氏が「庭に座っているのが好き」と語り、未亡人達が夕方に庭のベンチで待ち合わせてお喋りするように、センターは「行事の会場」だけでなく居間や庭の延長としての役割を果たしているが、それはこの空間的豊かさによって支えられている。

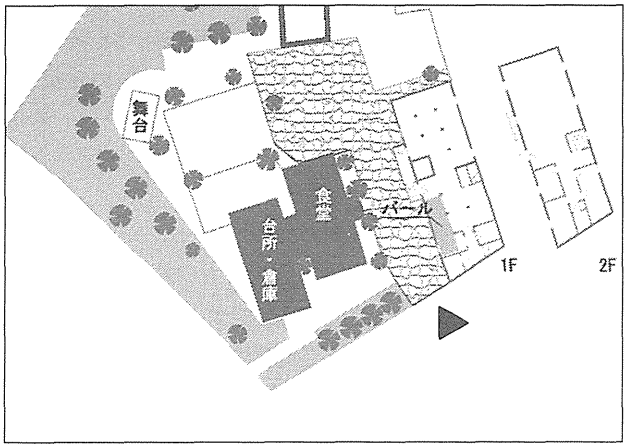

図 2−2　ジョルジョ・コスタ配置図

＜設立・会員・活動・運営＞国鉄労働者の娯楽施設が廃止されたのをきっかけに、仲間達があつまってセンター活動を始めたという設立の経緯から、国鉄や郵便局など職場つながりの会員も多い。交通の便がいいこともあって、他のセンターに比して遠距離会員も多い[注16]。近くにある幼稚園や保育園と交流があり、クリスマスのときにはサンタクロース役を務めたりするし、小学校からの依頼で、植物についてや地域の歴史について高齢者が教えに行くこともある。

2）カーザ・ジャッラ

＜立地＞’70 年頃開発された庶民向け分譲住宅団地[注17]内の広い緑地公園の一角にある。ある程度の生活階層の家族世帯が多く居住し、若者や子どもも多い。

＜施設＞（図 2-3）’70 年から活動。’96 年に市が施設改修。もとは農家で市の保存対象建造物に指定されているため、構造は変えていない。建物は公園の中でもひときわ目立ち、公園のバール的役割も果たしている。建物の前と裏の広場にテーブルが置かれ、お喋りやカードの場となっているが、「センターの庭」と公園の境界は不明。10 年前の改修後様々な活動に取り組み会員数が増加した。

＜設立・会員・活動・運営＞’70 年頃、ここにもセンターがほしいという声をうけて、市が「一緒に作りましょう」と設立した。会員は全員 60 歳以上。男性 486 名、女性 409 名だが男性は引きこもりがちで、ボランティアをしてくれるのは女性が多い。ボランティアとして活動するのは会員の約 10%、そのうち 13 名が運営委員。収益事業はバール（毎日）、昼食会（20〜25 回／年）、ダンスパーティ（30 回／年）、手芸教室の作品の販売、サッカー試合の TV を見る人からの寄付など。ここや事例④は、事例①と異なり住宅地に近いから夜もオープンできるため収益を出しやすいという。

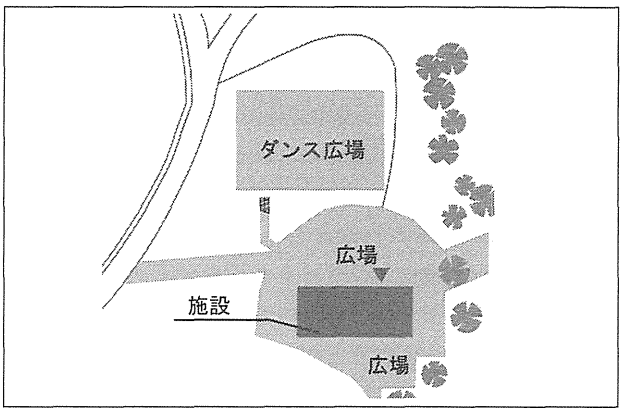

図 2−3　カーザ・ジャッラ配置図

③ペスカローラ

＜立地＞（写真 2−2）公営住宅団地のなか。スポーツ

施設の横にあり、デイセンターに隣接している[注18]。公営住宅団地なので高齢者が多い。
＜施設＞市所有の公共洗濯場を改修したものであり、他の3つの事例に比して狭い。庭と呼べるような区画された空間はないが、建物前の広場にテーブルや椅子をひろげ、カードをしたりワインを飲んだりしながら会員が談笑している。
＜設立・会員・活動・運営＞会員はほとんど徒歩圏。会員のなかに 20 名ほど若い人がいて手伝いに来る。会員の息子や家族が多いが、それ以外に、お金のない若者もバールや安くて楽しめるパーティに惹かれて参加。隣接するデイサービスセンターの高齢者とは普段はあまり付き合いはないが、食事会に来ることはある。年に2回、夕食会のときに全員招待（100 人くらい）して交流するほか、クリスマスやイースターにはお互いに行き来する。

写真 2−2　ペスカローラでの人々の集いの様子

④ラ・マニョーリア
＜立地＞ボローニャ市中心地から北東へ約 15 キロ、電車や車で約 30 分に位置するブードリオ市[注19]の歴史的市街地に隣接する良質な住宅地に立地。設立時（’95 年）は歴史的市街地内にあったが、2000 年、市がこの建物を購入、修復して引越した。市内にセンターは1箇所のみ。
＜施設＞（図 2−4）元電気会社の施設。庭は市民が使える公園。子ども達が来てほしいから公園にした。機械の洗い場だったが、市とセンターが協力し、民間会社の援助も受け、土を入れるところから取り組んだ。’01 年完成、子ども達にアンケートをとりピーターパン公園と命名。巨大遊具が船の形なのも、海賊船のイメージから。センターは、高齢者とお母さんと子ども達3世代の交流を目指している[注20]。公園の管理も会員のボランティア活動。公園の真ん中に大きなマニョーリア（泰山木）がある。ここに防空壕があり第二次大戦のときナチの爆撃を受けたがこの木だけは焼け残ったので、センターの名前をこの木にちなんでラ・マニョーリアとしたとのこと。
施設計画の際には、市は理事会を通して高齢者の意見を聞き、計画に反映している[注21]。
＜設立・会員・活動・運営＞’91 年、労働組合メンバーを中心に設立委員会を発足。当初は市は乗り気ではなかったが、運動を継続し、’95 年に市役所のある建物の一角を借りる形でスタートした。会員は今も増加中で、平均年齢は 66 歳〜67 歳。
三世代交流活動に力を入れていて、「おじいちゃん・おばあちゃんの日」「孫の日」があり、会員が孫を連れてきたり、高齢の大工さんがつくった鳥の巣箱を孫世代が公園に立てたりしている。小学校との交流も盛んで、シャボン玉大会やゴム鉄砲づくり、クリスマスツリーのプレゼント交換、庭の球根の植え付けなど、多彩な取り組みを行っている。また、地域文化の継承のため合唱団をつくり、昔の農作業の歌を女性会員が教えている[注22]。さらに、「連帯」を合言葉に[注23]地域のボランティア活動にも取り組んでいる。小学校にいる外国人労働者の子ども達に言葉を教えたり、宿題を見てあげる活動や、福祉施設訪問などに積極的に取り組み、そのために年間 5,000〜6,000€ の予算を確保している。

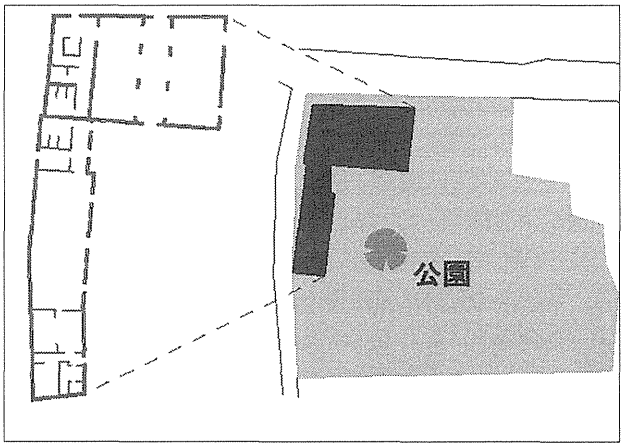

図 2−4　ラ・マニョーリア配置図

3.　日本の高齢者のいきいき居場所づくり

本章では、わが国における高齢者の居場所づくりとして3事例を取り上げ、イタリア社会センターとの比較考察を行う。

3.1　地縁組織型の高齢者の居場所

事例：京都市の老人クラブ
調査日‘06 年 6 月
調査方法：京都市長寿福祉課（クラブへの助成窓口）担当者、城巽及び室町学区老人クラブ役員へのヒアリング
1）　組織
「65 歳以上の高齢者によって構成され、会の目的に賛同し、年会費を納付した者でもって構成する」[注24]組

織であり、単位老人クラブ－ 学区老人クラブ連合会－ 区老人クラブ連合会－ 市－ 府－ 全国という上部組織が存在する。任意団体であるが、行政側も高齢者の福利厚生に資するものと位置づけ、市からの活動助成がある[注25]。京都の場合[注26]、実態的には学区老人クラブ連合会（以下「クラブ」）が活動の基本単位。各クラブは「当該学区に居住する高齢者をもって会員とする」と定めており、任意にクラブを選択することはできない[注27]。会員数等は表２－１[注28]。

運営の主体は、単位クラブ・学区・区までは任意団体であり、参加メンバーのボランティアによって担われる。市老人クラブ連合会以上の組織は行政の外郭団体であり、事務局機能は行政が担う。

表２－１　老人クラブの概要

	会員数	会費	高齢者数	人口	高齢者率
室町学区	850	1000	2,187	8,456	25.9%
城巽学区	116	500	731	3,948	18.5%
市全体	68,469	—	294,675	1469,481	20.3%

2)　活動内容

各クラブによって異なるが、主に日帰り旅行や研修会・講演会を年に１～２回企画するほかは、趣味に応じたのサークル活動が中心であり[注29]、清掃活動等の社会奉仕にも取り組んでいる。定常的な活動拠点はなく、学区の自治会館や小学校の空き教室、グラウンドなどを借りて活動する。

全般的に見れば、活発な活動を展開しているところは少なく、会員も固定化・高齢化する傾向にある。京都市都心部は、マンション建設や建売住宅建設に伴い、新規来住高齢者も増加しているが、この層はほとんど取り込めていない。

3)　イタリアのセンターとの比較

高齢者自身による居場所づくりの活動である点、会員制で運営されている点、自立した任意団体でありながら行政と連携しつつ活動している点、全国的な組織を構成している点において、クラブとセンターとは類似している。その一方、活動の量や質、組織の運営力量等においては、センターの方が高い。両者の活動の違いについて、以下の三つの視点から考察を行う。

ｉ）組織のつくられ方、活動の担い手

イタリアの場合は、センターの運営メンバーも、積極的に企画・運営を担うが、それは、多くの運営メンバーが、現役時代、労働組合運動等に関わるなど「協力して運営する」経験が豊富であることによる。それに対して、クラブの場合は、他の地縁組織同様、地域のなかで立場的に役目を担わざるを得ない人物が長となるケースが多く、活動も定式化したものを毎年繰り返す傾向がある。ただし、リーダー層は、長く地域活動に関わってきた人であるため、地域内での信頼が厚く、広い人的ネットワークを有していることも多い。自治連合会をはじめとする他の地縁組織との連携もとりやすい。

ⅱ）恒常的な活動拠点の有無

両者のもっとも顕著な違いは「いつでも使える、いつでも訪れて誰かと会える」恒常的な活動拠点の有無である。センターは豊かな空間を保有しているのに対し、クラブにはそうした恒常的施設が無いため、高齢者がいつでも訪れ、誰かと出会えるような「いきいき居場所」化が難しい。

ⅲ）行政との関係

充実した施設を提供しているという意味では、日本に比してイタリアの方がはるかに行政支援の度合いは強く、かつ、センター活動は、自立的でありながら市の社会政策の中に位置づけられている。行政はセンターと日常的に情報交換・意見交換を行い、必要があれば制度や仕組みを改革する。クラブの場合、行政からの助成額はそれほど大きくはないが、独自に資金を得て活動の幅を広げることはない。行政はクラブの活動に対して強い指導を行うこともないが、クラブを通じて高齢者の状況を把握したり、提案を受けたりするような対話もないため、市の政策とクラブの活動には有機的連携性はみられない。

4)　老人クラブの新しい展開

一般的にクラブは、会員構成が古くからの住民に偏り、リーダーも「地域のなじみの人」[注30]であることが多い。そのため、京都のように、地域の産業構造が変化し新規来住者が増えた地域では、会員の減少や活動の硬直化、会員の高齢化が著しいケースも多い。対象の二地区とも、こうした現状に対する危機感から、地域の高齢者の潜在的ニーズに応える活動を開始している。この二地区の活動を通して、クラブの今後の可能性を示しておきたい。

＜城巽学区＞

この学区ではここ数年、志のある地域住民であれば誰でも自由に参加できるまちづくり組織「城巽五彩の会」[注31]が活発に活動している。マンションに転居してきた新規来住者の参加も多く、クラブ副会長であるＫ氏もその一人であり、クラブ活性化のためにこの活動に加わった。このように、志で結ばれるメンバーが、地域のネットワークを活用しつつ、志縁型のいきいき居場所づくりに取り組みはじめたという点は注目に値する。Ｋ氏は「自分のマンションにも初期認知症の人がいて気になっている。独居老人などの引き出しに積極的に取り組みたい」として、老人クラブの必要性を語るが、そのためにも「ちょっといってくるわ、と気軽に出かけれる、いつも誰かがいる専用の場所が必要だ」と強調する。いま求められているものは、まさにイタリアのような「場所」である。

＜室町学区老人クラブ連合会＞

メンバーの固定化と高齢化を打破し、若手会員（60代ー70 代前半）の活躍の場を増やすため、一若手会員を中心に地元の歴史を尋ねる「歴訪会」活動に取り組んでいる。老人クラブは老人の会なので入会したくないが「歴訪会」には参加したいというメンバーが増えているため、「室町老人クラブ」という名前はやめて「室町クラブ」にしたという。上京の他の地域にも同じような会が生まれているとのこと。この活動が物語るように、今後の高齢者の居場所づくりで重要なことは、「敬老＝お年寄りの面倒を見る。お年寄りを喜ばせる」ことではなく、文化的活動のように意味あることに主体的に取り組むことのできる場を創出することであり、ここにもイタリアのセンターの目指すものとの共通性がある。

3.2　志縁型組織の高齢者の居場所（1）

事例：縁側サミット

三重県鈴鹿市寺家（じげ）地区、Ｎさん宅

調査日：2006年８月

1)組織発足の経緯と特徴

Ｎさんは、60 代半ば。若い頃は高校の家庭科教師をしていたが、２児の子育てが終わった後、20 数年前から地域でいくつものボランティア活動に関わるようになる。ある老人ホームを訪れた際、あまりにも固い冷たい空間に身をおく老人たちをみて「高齢者はもっとあたたかいところにおらなあかん」と思い、自宅で<縁側サミット>をやることを思い立った。<縁側サミット＞とは、週 1 回、自宅の縁側と座敷を開放して、地域の高齢者たちが共に古い着物地等をミニ着物等にリメイクする制作活動をしつつ、歓談・交流する場のことをいう。（以下「縁側」）

こうして始まった縁側は、コンスタントに毎回およそ10 数人の女性たちが集まり、交流と制作活動が今日まで継続している。参加者の地域は、地元寺家地区を中心に三重県各地に及んでおり、地縁を越えている。

2)活動内容

古い着物は捨てられることが多いが、“今 80 歳の人が娘さんのとき、着ていたロマンのこもっている”古着を集めて新しいステキな小さな着物に仕立てると、記憶が生き続けられる。1 枚の着物から 7 枚つくる。小さくしたときに着物としてもっとも見栄えのするように身頃と幅のプロポーションが工夫されている。「身頃は 4 寸 6 分がいちばんエエ」と、やっているうちにわかってきたそうだ。「昔の和裁よりもっと手頃なやり方を今の人に教えてあげて、着物の文化を伝えていくことが大切や」というＮさんのやり方には柔らかさがある。「一般の和裁教室に比べ、ここは勝手にきたい時間にきて帰りたいときに帰れて、タダ・・・」という志ある人たちの自由参加に長続きの秘密がある。

持続する秘訣といえば、ここにやってくる人たちが人間的感動を持ち続けていることにある。「ここにくると、着物づくり教えてもらうだけでなく、いろいろ先生からいうてもらえ、みんなでいいあって、心の財産をいっぱいもらえます」と、参加者のひとりはつぶやく。「息子の世話 20 年、おじいさんの日々の世話でたまったうっぷんが、ここにくると消える、着物をきれいにつくっていくことで、気持がやさしくなる」、「つくるだけでなく、しゃべりながらやることで気が晴れていく」というように、『目的的行動』に終始すると枠にはまってシンドサがつきまといがちだが、ここにはつくる目的と非日常的なしゃべる楽しさが相互に浸しあう関係が生まれている。創造的ワークショップとはこういうものだ。

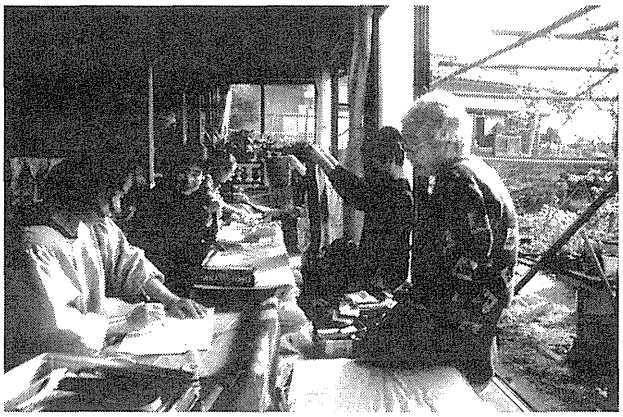

写真 3−1　縁側サミットでの出会いの光景

3)イタリアのセンターとの比較

センターと縁側には同質性と異質性がある。それを比較考察し、高齢者の居場所づくりの論点を抽出しよう。

ｉ）語りあいと笑い・・イキイキとした生の分かちあい

両ケースにはしゃべる楽しさと笑いが自ら生じ、イキイキした生の分かちあいに赴いている。縁側では先にふれた「お年よりの世話」の話をした女性の発言の後に、すかさず、誰かが「おじいちゃん早よ死んでくれとは家ではいわれへんけど、ここにくるとそんな冗談がいえる」と添えることで、笑いの渦が巻きおこる。笑いには、心の疲労を解き放つとともに、状況を新しい目で見つめる開かれた心をもたらしてくれる。縁側は、着物仕立ての創造的行為により精神の高揚をもたらすとともに、言葉のやりとりによる笑いのおかげで心身の健やかさを参加者にもたらしている。つくり、しゃべり、わらうという一連の表現行為を生みだす前後には関連する行為が具体的であるところに、縁側が創造的ワークショップであることが示されている。

センターの談笑は、食事会・ダンスパーティ等の相互楽遊性にもとづいている。縁側は制作を通してのコミ

ュニケーションと笑いの量質ともに豊かである。両者とも、高齢者たちが共に在ることが話しあいや笑いといった社会的資源性[注32]の育くみをもたらし、イキイキとした生を促しているといえる。

ⅱ）表現の力と非日常的経験の分かちあい

センターでも、お年よりの女性たちが刺繍をしたり人形づくりをしているが、縁側は、地域での活動に終始せずに、彼女たちの作品は、海外にまで出展されている。先年は、ウィーンとウクライナに赴き、170枚もの着物を展示したという。次は、ザルツブルグのお城でやる予定だという。

古着のリメイクという表現活動が、なぜ当事者のみならず、海外の人びとにも感動の輪を広げるのであろうか。「着物つくっているとき、気持が内からやさしくなっていく。」この言葉には、人の心の内から外へと向かう「表出」としての表現（expression）の意味が明らかにされている。とともに、着物づくりは、表現において独特のスタイルを引っぱる力がある。すなわち、日本の伝統的文化の形としての着物という「外」が人の「内」に再び戻ってくることによる「再現」としての表現（representation）がおこっていることである。

縁側のメンバーも社会センターのメンバーも、海外旅行といういささか冒険心をよびさます非日常的体験の分かちあいにより、生きることへの情念が促されていくという共通性がある。高齢者の居場所において生きる力と精神の高揚をもたらすためには、共に表現活動や旅等を楽しみあうことが重要である。

3.3　志縁型組織の高齢者の居場所（２）

事例：千里ひがしまち街角広場（大阪府豊中市）

調査　2006年８月

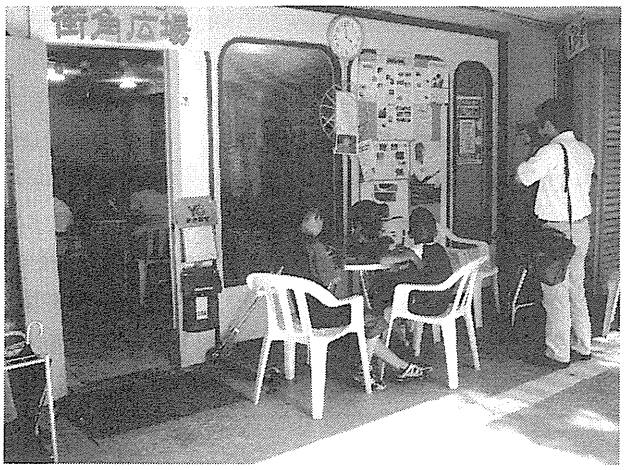

写真３－２　街角広場　外観

1)広場の概要･･･目的、施設、活動、利用者

ひがしまち街角広場(以下広場)は、千里ニュータウンの地下鉄千里中央駅から東へ徒歩１５分、新千里東町近隣センター内に空き店舗の一つを借りて開設されている。

広場の活動目的は、地域コミュニティのための談話室、地域情報の交差点であるとともに近隣センターの活性化の一役を担うことである。

経緯は平成13年９月に「歩いて暮らせるまちづくり」の社会実験として始まり、「当初２ヶ月だけの予定だったのが半年間続いた。試算すると、１日に20人来れば成り立つ。半年で30万円貯まり、これが無くなるまでやろう」ということになり、現在に至っている。無理をせずに、あくまで等身大の活動を続けている。

活動は日常的には談話室であり、「行事は春の筍掘り、夏の七夕、秋は9.30の開設記念日、12月はしめ縄づくり」ぐらいであるが、「おやじの会の例会」が月１回開かれている。又、写真クラブ、千里の竹の会（による竹藪整理、竹炭作成、竹細工子ども教室）等広がっている。

予算は家賃５万円、光熱費6,800円、水道代1,600円、雑費1ー1.5万円、１日に30ー40人、月1000人来ると月に１万円は貯金できる。赤字は現在無い。

利用者は女性高齢者が多いが、調査当日は男性高齢者もチラホラと訪れ、比較的若い市会議員、関係者さらには学校帰りの小学生達が水を飲みに立ち寄る姿が見られた。来る人は徒歩圏の人が多く、地域に根ざしている。

2)支える人的資源･･･リーダー、スタッフ、行政

運営スタッフは「勝手ボランティアである。カレンダーに都合を書き、来れる日を勝手に書き込み、それで何とかなっている」。ボランティアの中には箕面、八幡など遠方から来ている人もおり、単なる地縁を越えている。「当初、連合自治会、民生委員など交代にやった。そうするとその関係者しか来ない。それ以降ボランティアでやることにしたら、毎日15,6人は来るようになった。普段は女性スタッフ中心であるが、部屋の引っ越しの時は、男性が活躍した」。老若男女に広がっている。

街角広場の管理の責任者はＡさんであり、このリーダーの志と人間的な魅力が大きい。Ａさんの人脈が大きな役割を果たし志縁の輪を作り出している。「三十数年間で、子供会を作り、自治会役員をやった。PTAの役員も４，５回やった。豊中社会教育委員会、図書館分会長、青少年育成会会長、人権協など」地域の役員を歴任し、市民、豊中市双方の信頼が随分厚い。そこから、市の政策推進部の若手、実力者のバックアップを得ている。

「行政や社協が作るとルールなど堅苦しくなる」ので「街角広場は場所を提供するだけで、使い方は使う人が決める」すなわち「百人百様の使い方がある」。「現状の行政施策は老人達を支えすぎている。自分たち自身で企画することに良さがある」。自主的に企画し、柔らかなルールで運営していることがここの良さであろう。

3)恒常的活動拠点･･･いきいき居場所

もともと「この地域にお茶飲んでコミュニケーション出来る場がなかった」ことから出来たが、現在では「ここに来ると、誰かに受け止めてもらえるという場」になっている。場所の力がここでも大きい。

4. 全体的考察

イタリアの「社会センター」のケーススタディは、日本における研究報告としてははじめてであり[注33]、わが国の今後の高齢者の居場所づくりに多様なヒントを投げかけている。とりわけ、センターが、住民発意、行政による公共空間整備・提供、住民（高齢者）による自主運営のしくみのもとに成立しており、地域毎に空間形態も運営内容も多様である点は、わが国の高齢者福祉政策体系と地域での実践のあり方に深い示唆を与えている。そこで、イタリアと日本の高齢者の居場所づくりの比較考察を通して得られた主題に向けての知見と今後の課題を束ねて本研究のまとめとしたい。

4.1 「活き活きとした人生」の創出の要件

高齢者の居場所がもたらす「活き活きとした人生」（well-being）の創出とは、ひとりひとりがボーとできる単独安心性と、他者とのコミュニケーションができる相互楽遊性の両面実現であり、とりわけ、〈共にあること〉が、自己発見と自己確認を基本的にもたらすことである。単独安心性と相互楽遊性の両面が実現されているイタリアの「社会センター」は、日常的な居場所（友人と出会い、バールで語り、カードに興じる等）を提供するにとどまらず、非日常的体験としての食事会や講演会、ダンスパーティ、国外旅行等「活き活きした人生」を楽しむ場を実現しえている。共に食べる、共に踊る、身体的ふれあい等を通して、高齢者ひとりひとりの内的生命が高まっていき自己変容を感じとりうる場が成立していることは、「居場所づくり」の高次のねらいとして注目される。イタリアでは高齢者たちが自分たちで遊び心をもっていきいきとした生を送る場・しくみ・人づくりに特徴があるのに対し、日本は、どちらかというと高齢者を支える仕掛け人の育みに強さがある。

しかし日本の「縁側」は、かの国の「センター」とはまた異質の「居場所」づくりに赴いている一面がある。「縁側サミット」に限られてはいるが、自己表現と文化表現を実現している。

「活き活きとした人生」の創出をもたらす高齢者の「居場所」の要件としては、単独安心性と相互楽遊性、さらに、自己表現と文化表現が重要である。

4.2 トポスとしての「居場所」

高齢者たちが地域で〈共にあること〉が、自己発見や自己表現や文化表現につながるためには、その居場所の空間的側面において、ヒト・モノ・コトがゆるやかにかかわりあうトポス（活き活きした生彩ある場所）であることが肝要である。トポスとしての居場所は、新しい均質な機能的空間ではなく、地域の古い空間資源の繕ろいと再活用、あるいは、つくり替え＝versioning や使いまわし＝recycle によって生成する、場所の記憶のよみがえりやユーザーによる身体的使いこなしや身体的コミュニケーションを育くみ、ヒト・モノ・コトの関係の豊かな柔らかい場所である。居場所のもたらす身体的ふるまいは、笑いやユーモアやそれ自体何らかの「意味」を発生させ、身体の社会的資源性を引きだしていく。高齢者の居場所は、身体の社会的資源性を活性化させることにより、単なる物理的空間をこえて、身体的空間（カラダの動きと空間との間に相互浸透関係が生成する柔らかい場所）に育まれていく。地域の空間的資源と人的資源（後述）を生かし、高齢者の身体の社会的資源性という自己とまわりの開かれた関係づくりの潜在性の海に漂い出ることが高齢者のための居場所づくりとなる。

4.3 わが国の「いきいき居場所」の可能性と方向性

本考察は以上のような理念としての高齢者の居場所のウェル・ビーイング的側面とトポス的側面について明らかにするとともに、現実の地域社会における存在形態のパターンを、3 つの軸の枠組みの中に位置づけられることを検討してきた。「組織的―自然発生的」「地縁―志縁」「高齢者交流―多世代交流」という 3 つの枠組みのなかで、今回の調査対象を位置づけると図 4－1 のようになる。この図は、居場所のパターンさまざまを伝えてくれる。この図はあくまでも、本研究の中で明らかにしたことに基づく仮説に過ぎないが、この図を元にいま少し、わが国の「いきいき居場所」の可能性と方向性を論じて置くならば、以下の三点が指摘しえよう。

まず第一に、老人クラブは一見官製のにおいが強く、社会センターと性格や活動性が異なるがごとく見える仕組みであるが、活動の担い手が地縁的つながりを持ちつつ、一方で従来のように「地縁的しがらみから役を行う」のではなく、「高齢者のイキイキ居場所を創出する」という志においてもつながるような運営と人材発掘に取り組むならば、日本型「社会センター」化しうる可能性は大きい。かつ、本論文で明らかにしたように、すでにいくつかの老人クラブのなかで、志を持って活動に取り組む人材が生まれ、また文化活動など志縁ネットワークづくりの試みが始まっている。団塊の世代がリタイアした場合、その動きはより活発化する可能性がおおきいと考えれば、この動きに注目し、支え、育むことが重要である。この場合、2 章でも述べたように、恒常的な

活動拠点（誰もがいつでも寄れる、誰かに会える場所）の提供がきわめて重要であることは、イタリアの事例をみても明らかである。街角広場のように、自立的に場所を確保・運営している事例もあるとはいえ、大きくは行政の役割である。

第二に、縁側サミットや街角広場のように、一切の支援無しに「いきいき居場所」を創出する志の力、個人的ネットワークの力は重要である。このような動きを無視せず、支える仕組みの創出が求められている。この場合特筆しておくべき点は、縁側サミットも街角広場もともに主催者達が、地縁活動の中で地域内のネットワークと信頼を獲得し、また行政との信頼関係を構築していたことにより、広くすばやく地域密着型の志縁ネットワークが形成されていったという点である。

第三に、「いきいき居場所」づくりにとって（あるいは、それ以外の高齢者福祉活動や子育て支援活動などにとっても）大切なことは、歩いて通える小地域ごとに顔見知りの仲間が集うような居場所が存在することであり、さらに欲を言えば、他の人的ネットワークや組織との連携が可能であることが望ましいとすれば、この活動は小地域を基盤とするものである必要がある。老人クラブのように、地域組織として成立したものはその点においては有利である。一方、単に理念・志のみを掲げて広範に有志をあつめるタイプの志縁型組織は、ややもすると地域での人的ネットワークに乏しく、そのために良かれと思って用意した場が受け入れられなかったり広がりが弱い場合も多い。縁側サミットや街角広場が示すように、志ある人々の自由なネットワークを基盤としつつも、小地域内での縁を大切にし、小地域内のコミュニティの輪のなかにリンクしうるようなあり方が重要であり、可能性に満ちている。

要するに、わが国において「いきいき居場所」を活性化させようとした場合、地縁型を発展させ（換骨奪胎し）そのなかに志縁性を持ち込む方向性と、小地域にきちんと根ざした（地縁ネットワークのなかにある）志縁型活動を支え制度的に位置づけることで、地域ネットワークのなかに志縁的動きを位置づけ、拡大していく方向性の二つの方向がありそうである。このとき留意しておきたいことは、ここで示す方向性は、決してこれまで語られてきたように「地域住民組織」か「市民活動グループ」かという二項対立的構造のどちらが「いきいき居場所」の担い手としてふさわしいか、や「市民活動グループ」が「地域住民組織」を支援する可能性について論じているのではないということである。ここで示しているのは、アプローチの違いこそあれ、いずれも地縁ネットワーク内に志縁ネットワークがうまく重なりつつ成立していくことの重要性である（簡単に言えば、近所付き合いの延長線上にある「いきいき居場所」活動）。そしてそれが可能になったとき、「いきいき居場所」か、わが国のすぐれた特質である地域型の高齢者福祉活動[注34]と相互関連的に機能することで、イタリアの社会センターが達成しえていない領域（寝たきりや引籠もり高齢者への支援など）をも支えうる可能性を備えていると考えられる。

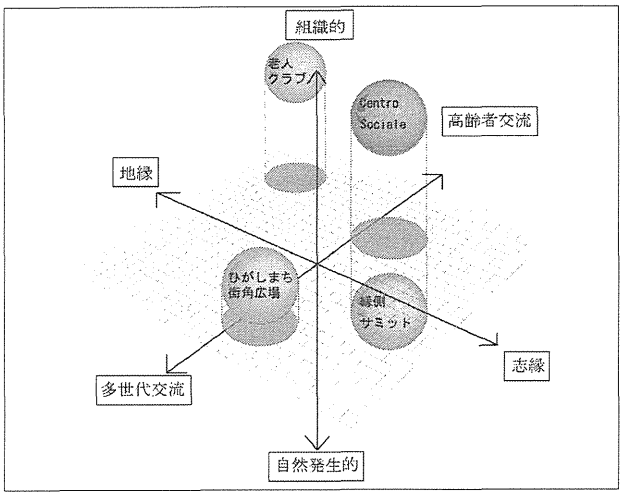

図4−1　高齢者の居場所の位置づけパターン図

4.4　居場所を生かす人的資源

高齢者が共にいきいきした生を送りうる高齢者の居場所を高齢者自身がうみだし運営していくには、仕組みの創出と合わせて担い手としての人的資源の存在と育みが重要である。

両国比較において、人的資源としてイタリアは組織人、日本は高い志と情熱をもつ個人の差異がある。前者は、労働組合活動等による組織運営の訓練や価値観の形成に特徴を見出す人々がお世話をしている。日本は志縁と地縁でかなり資質が違っている。地縁の場合「役割」を大義名分として意識することが人を育くんでいく。即ち、地縁活用の必要性と地縁組織から自由になることの必要性の両面のバランスが大切である。いわば「地縁組織内志縁組織」の担い手になることが求められよう。

組織人と個人の違いはあるが、両国とも秀れたリーダーにはコンセプトと情熱において秀でている共通性がある。

そこには、地域の高齢者・他者のために情熱的に専心する「わたし」というひとりの人間の生き方における、輝かしい共通の真実が含まれている。すなわち、わたしとは、無数の他者とのかかわりのなかで独自のかけがえのない織物として紡ぎだされる存在である。高齢者の居場所の参加者もお世話役も「わたしという織物をおっている他者の糸を一本一本えりだしつつ」まわりの一人ひとりのぬきさしならぬ豊かな関係に生きる意味を見出していく時、人は永続的に成長・変容し、豊な生き方を享

受していく。

地域の空間資源と人的資源が活用され、地域・志縁のほどよい組み合わせのもとに、「活き活きとした人生」の創出の場としての多様な居場所が育くまれていくことに資するため、今後も多くの実践にふれ、考察をさらに深めていきたい。

尚、ボローニャでの調査を進めるにあたり、現地在住の通訳青山愛氏から多くの助言と協力を頂いた。記して感謝する。

＜注＞

1) イタリアの社会センターのデータ出典
RELAZIONE DI BILANCIO ANNO 2004 (CENTRO RICREATIVO CULTURALE GIORGIO COSTA / CASA GIALLA:Relazione bilancio consuntivo 2003 / Centro sociale Anziani autogestito Pescarola Bilancio preventivo per l' anno 2004 / CENTRO SOCIO CULTURALE "LA MAGNOLIA" BUDRIO Bilancio di Previsione 2006
2) http://urp.comune.bologna.it/WebCity/WebCity.nsf →Guida ai Servizi di Comune di Bologna→Anziani →19centri Sociali Anziami
3) 光熱費や維持費はセンター,改修費等は市.
4) Associazione Nazionale dei Centri Sociale,Comitati Anziani e Orti＝全国高齢者と菜園団体の社会センター協会
5) 箇所数は、ANCeSCAO のボローニャ県代表 Dalmonte 氏ヒアリングによる。この箇所数は ANCeSCAO に属する全団体数であるため「菜園グループ」も含まれる。なおボローニャ市の総人口は約 370,000 人
6) ボローニャを州都とするエミリア・ロマーニャ州は、歴史的に労働運動、協同組合運動が盛んな地域。センターの運動も、中低所得労働者階層の要求として、'70 年代初頭にボローニャからはじまり、おもに北部イタリアに広がった。そのため、会員数もエミリア・ロマーニャ州のみで全国の約 1／3 である
7) イタリアでは、昔の「都市」部がいまも、機能的・形態的に「都市の中心」として存在しており、その範囲を「centro storico=歴史的中心市街地」とよぶ
8) イタリアの街のいたるところにある喫茶店。市民のお喋りの場
9) 高齢者サービスを社会的サービスと医療サービスにわけて考え、センターを含む市民活動は前者の一部をカバーするが、後者は行政の役目という認識が、市民側にも行政側にも確固としてある。寝たきり高齢者のサポートは後者の範囲
10) 市の担当者によれば、従来型の福祉施策ではコスト増に耐えられないため、介護予防への切り替えが求められている、とのこと
11) イタリアには日本のような地域住民組織がないため、近隣の情報を集約しうる仕組みは、教区教会かセンターにしかない
12) 情報伝達の制度があるわけではなく、おしゃべりのなかで情報が伝わり新しい提案が生まれる、という
13) 例えば、センターの情報により、65 歳以上の高齢者がスリや盗難にあった場合保険がおりるようになった
14) それまで女性が 55 歳、男性は 60 歳だった年金支給年齢が、それぞれ 61 歳、65 歳に引き上げられた
15) 映画博物館や大学の施設、幼稚園や小学校が建設され、タバコ工場跡地の公園化、近代美術館の建設（歴史的建造物の改修）などが進んでいる
16) センターがあるポルタ区居住者が約半数
17) Edificio Popolare：市が業者に土地を譲渡し分譲住宅の供給を委託する。土地を安く提供するかわりに公的規制あり
18) センターは、可能な限り高齢者のデイサービスセンターに隣接させるようになっている。2.3(3)で述べた「市が計画している、センターと要介護高齢者との交流」の第一歩
19) 市人口約 16,000 人。住民の多くは、ボローニャ市、あるいはボローニャとブードリオ間の企業に勤務している
20) 三世代同居あるいは、近居が多い地域
21) 公共施設計画において、イタリアでは公聴会は行われるが、設計へのユーザー参加はあまり行われていない。
22) そのほか、この地がオカリナ発祥の地であることから、センター施設をつかってオカリナ演奏のグループの活動も盛んであるが、センター活動とは区分されているため、本稿では紹介を省いた
23) Solidarieta'＝連帯・団結はイタリアの協同組合運動などで常に語られる合言葉
24) 城巽シニアクラブ会則
25) １単位（会員 50 人以上）あたり 46560 円／年。活動計画書、報告書の提出が必要
26) 京都は小学校区が地域自治活動の単位となっているため、老人クラブもこの単位が基本となっている
27) 京都の場合、学区老人クラブは学区の各種団体のひとつとして、各種団体のひとつとに名を連ね、地域と密接なつながりを持つ
28) 市の高齢者数、人口は H１７年推計人口データ。他は H１７データ年
29) 註：城巽：グランドゴルフ・カラオケ。室町：民謡・カラオケ・俳句・ウォーク・ゲートボール・囲碁、将棋。毎年「演芸大会（サークル発表会）」を行う
30) 居住暦が長く、知人も多く、他の地域住民組織の長とも顔見知り
31) 志で結ばれるという意味では市民活動型であるが、自治連合会と密接な協力関係を持ちながら活動すると言う意味では地域住民組織の利点も併せ持つ
32) 「身体の社会的資源性とは、身体が作る老廃物の外見や匂いなど、それ自体何らかの「意味」を発生するもの・・・他者とかかわる際に身体が担うそれらの資源性の重みのこと・・・」（根ヶ山光一，川野健治：身体から発達を問う－衣食住のなかのからだとこころ，新曜社，2003.3，pp.iii，iv）本稿では、この指摘に触発されつつ、他者とのやりとりにおいて、笑いや香りなどのさまざまの「刺激」が正の社会的資源として働らくことに解釈を広げ、「コミュニケーションにおいて身体が道具として使われる」状況を身体の社会的資源性としている。
33) センターを紹介した文献には以下がある「ボローニャの大実験－都市を創る市民力」p158.164、星野まり子、三推社・講談社、2006 年 5 月
34) 京都市春日学区での、地域住民組織主体の高齢者支援活動が有名。全国の社会福祉協議会が取り組んでいる。

＜参考文献＞

1) 前田信彦：アクティブ・エイジングの社会学―高齢者・仕事，ネットワーク，ミネルヴァ書房，2006.5
2) 植村勝彦・他 編：よくわかるコミュニティ心理学，ミネルヴァ書房，2006.10，pp.186，187
3) 延藤安弘・他：「場所の力」と「人間力」の相互浸透による<まちの縁側>形成－高齢少子社会における住宅市街地再生の研究－，住宅総合研究財団研究論文集 NO.31，2005.3，pp.125～136